

食堂で朝食を取り、ムーサと別れた一行は、街に出て海人に声をかけて回った。

北の時計台から、南の繁華街。東の宿屋通りから、客船の着く西の港までをぐるりと巡る。

が、『スリミンカ』という目的地は掴んだものの、船長が失踪した理由の核心は掴めずに、時間ばかりが過ぎていく。

気づけば太陽はとっくに傾き、空には夕暮れの気配があった。

早朝から夕方まで街を歩き回り、さすがにくたびれてしまった一行は、宿に戻って今後の動きを決めることにした。

「一通りは聞き込みしたけどな。有益な情報は船長と……」

「スリミンカかぁ……なかなか遠いぜ？　いよいよ大変な旅になってきたよなぁ」

宿の部屋、ベッドに寝転んでノランが言った。

「うん……」

小机の前の椅子に座るノアが、申し訳なさそうに言う。

「ここまで皆を巻き込んで……私、記憶が戻らなくても、みんなといられるだけで十分だよ」

「まだ諦めるのは早いだろ？　気持ち切り替えていこうぜ？」

「ノア」

リアムは微笑んで、

「今は種を蒔く時期なんだよ。初めから答えに辿り着けたらとてもいいことだけど、ロインや食堂の人にも協力してもらっているし、明日は何か知ることができるかもしれない」

「そうだぜ。ノアの今までを知ってる奴がいなくても、俺たちは今のノアのことを知ってる。ノアが記憶を取り戻したいと願ってくれるなら、それが俺たちの旅の目的にもなるんだ」

ネックも穏やかな顔をした。

ノアは、みんなに気を使わせてしまったこと、そしてまた自分が沈んでしまったことを謝ろうとして、「ご」と言いかけた。もちろん、もうその先は言わない。

優しい三人に向け、ノアは微笑みを浮かべて、「ありがとう」と前置きし、

「私、知りたい、自分のこともみんなのことも、この世界のことも。だから諦めないで頑張るよ」

窓の外から悲鳴が聞こえてきたのは、その時だった。